

説教要旨

「あなたの民は、わたしの民です」

イスラエルへの教会の責任

ルツとナオミの逸話は、「教会とイスラエル」との間にある美しい情景を見ることができません。

A. チャレンジ

この話の意図するものは、ナオミのために行動したルツとなるよう、異邦人クリスチャンへのチャレンジとして、イスラエルの民とともにある特筆しがたい愛の契約へ献身するためのものと見ることができます。

B. 歴史的前後関係

このストーリーは、士師記の時代に起こりました。「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」(士師記 21 章 25 節)時だったと、聖書は語っています。

ルツ記 1 章 1 - 17 節

ルツの困難な決断は、モアブという異教の故郷から旅立ち、イスラエル民族に自ら加わるという、彼女は人生においてこれまでにない最善の決意を固めました。ユダヤ人の裕福な地主、ボアズとの結婚の決断を、ルツはしたのです。

こうして、これまで子どもを持たなかった、生んだこともない異邦人ルツが、偉大なるダビデ王の曾祖母となり、やがて同じ町ベツレヘムでやがて生まれるだろう、「メシア=救世主」の家系上、ポイントの人物となりました。

C. 比較 対照 平行線

1. ナオミとユダヤの民

ナオミのように、ユダヤの民は、モアブの地で寄留者でした。それまで数十年間、イスラエルの地は飢饉（ききん）に見舞われていたのです。

2. ナオミへのオルパの関係は、多くの「教会」と「ユダヤの民」との関係を見ることができます。

ルツやオルパは、ユダヤ人と結婚した異邦人でした。義理の姉妹ルツのようではなく、必要とされている大いなる時であるにもかかわらず、ユダヤ人の義理の母を棄てて、モアブの地、異邦人の世界にとどまることを、オルパは決断したのです。

オルパには、「教会」と「イスラエル」の間にある切り離すことのできない絆について、なすべき感謝ができない点や理解が足りない点で、異邦人教会に見る多くの部分を見出すことができます。

ユダヤ人とともにある彼女の自己性の代わりに、オルパという教会は、イスラエルを後ろに追いやり、ヘブルの民の根から実質的に自らを切り落とす、異宗教的な文化を支持したのです。

オルパは、最初にナオミとともに出発しようとしていました。(10 節)

最後には、オルパという教会は自らを守るため、ナオミの元から離れることを決断します。オルパという、多くの教会は、共に歩むというよりもおしゃべりすることに時間を費やすことが多いのです。教会は、ユダヤ人の救いによって恩恵をこうむっている(ヨハネ4:22)にも関わらず、ユダヤ人の多くの必要な時には、それを投げ出してしまっているのです。

3. オルパという教会の歴史とユダヤ人

初期の教会は、オルパのように良き態度を持ち、「ユダヤ人の杖」をしたい求めていました。初代教会は、異邦人ビリーバーらはメシアニック・ジューに沿って働きをなし、礼拝していました。

彼らは、ユダヤ三大祭りを守っており、滋養あふれる樹液が満ちる「イスラエルのオリーブの木」(ローマ 11 章 17 節) から自らを切り離すことを全く意図していませんでした。ナオミを最後には棄てていくという結末、自分の道を選んだオルパのように、異邦人教会の多くは同じ行動をしてきました。

イエス・キリストの十字架刑当時の世代は、ローマ軍はエルサレムの町を略奪し、結局はイスラエル固有のユダヤ文化と第二神殿をも破壊したのです。モアブの地にあるナオミのように、異邦の地に、ユダヤ人は自らを見出します。

数百年もの間、教会は、多くの主要部分において、ユダヤの民の重要性を軽視するようになりました。

十字架刑においてローマ帝国と協力したユダヤ人との関連性を、またその後すぐに起こったエルサレム神殿の破壊を、神さまがイスラエルを終結させたしるしだと主張する、多くのクリスチャン神学者が立ち上がりました。神さまは一度、イスラエルのすべてを拒絶されました。神さまは、新しい選民を今形作っています。教会は神さまの新しいイスラエルとな

りました。

「アンチ・セミティズムは裁かれた」という、良い神学という名の下に、全てがなされました。ジョン・クリソストム、彼は4世紀に生きたキリスト教神学者であり、彼の説教要旨の一つにユダヤ人についてこのように書かれています。「(彼らは) …殺人者であり、破壊者であり、悪魔に制せられている、…彼らは一つのことを知っている。彼らののが求める、飲み干して、満足するところは、互いに殺し合うことである…」そして、今現在もジョン・クリソストムは聖人と呼ばれているのです！！

6世紀たった後、総じてクリスチャンとして呼ばれる人々によって、さらにひどい、隠されざる憎しみがなお明らかにされました。十字軍について、彼らの騎士道精神、信念、熱意は頻繁に思い起こされています。しかし実際には、十字軍の多くは、その情熱によってユダヤ人を憎悪した残酷な人々でした。キリストを殺害したというユダヤ人がなした役割への刑罰として、十字軍は、聖地イスラエルに居住するユダヤ人への「報復」を行いました。A C 1 0 0 0年、十字軍が初めて聖地に到着した時には、そこに約 30 万戸のユダヤ人の住居がありました。十字軍が聖地を離地したその 2 0 0 年後には、わずか 1 0 0 0 家族ほどのユダヤ人しかいなくなってしまったのです。

アンチ・セミティズムは、プロテスタント神学者の書物にもその証拠があります。マルティン・ルターは「信仰による、公正な福音」という彼の新しい発見について、ユダヤ人が喜んで受容したと信じて、彼は初期においてはユダヤ人に同情的でした。しかし、ユダヤ人がそのメッセージを受け入れなかった時、ルターはユダヤ人に反対して深刻な敵意を持つようになったのです。その結果、ローマ教会と同様、ユダヤ人へのルターによる侮蔑は、深刻なものとなりました。彼は、ドイツからユダヤ人排除を呼び掛け、ユダヤ人のシナゴーク(ユダヤ教会堂) とユダヤ学書籍の破壊をも呼び掛けたのです。

ナチス・ドイツが、ドイツにおいて勢力を増すことは驚くべきことではありませんでした。ナチス・ドイツは、彼らの政策を正当化するために、ルターのような神学書物を用いたのです。その結果、6 0 0 万人ものユダヤ人が絶滅させられたのがホロコースト(ユダヤ人大虐殺)でした。不幸にも、多くの教会が何もしない立場に立ち、いやいやながら手を貸したのです。

使徒パウロは、ローマ 11 章 11 節「救いが異邦人に及んだのです。イスラエルにねたみを起こさせるためです」と、私たちに教えています。しかしながら、事実は、ユダヤ人は私たちの宗教に対し、ねたみませんでした。

わたしたちは、教会オルパのように、イスラエルが真に必要としている時に自分の地に舞い戻ってしまうのでしょうか。それとも、ルツのように支援、励ましを提供する用意を常になし、イスラエルにしがみつこうとするべきでしょうか。とりわけ神が彼女を彼女のイスラエル=故郷へ連れ戻し、究極的には彼女の神に立ち返らせようとしているのですから。

4. ルツ—教会における異邦人という一部分は、イスラエルとの関係においてあるべき描写

オルパとの対比で、教会がユダヤの人々との関係において、どのようになすべきかをより多く発見する点で、ルツを見てみましょう。

a. ユダヤ人を無条件に愛するとは、ルツのようになること

ルツ記 1 章 8 節、14—16 節

幾つかの聖書の余白には、「わたしに懇願しないでください」とあり、「私に反対しないでください」とも読みます。共にイスラエルに帰るというルツの提案について、最初ナオミは閉鎖的でした。しかしルツはとにもかくにも一緒に行くことを決断したのでした。ルツによるナオミへの愛は、ナオミからの拒絶によっても歯止めがかかることがありませんでした。ナオミが望まなかったとしても、いつも変わらずにナオミのそばにしがみつこうとしたのです。

14 節「ルツは彼女（ナオミ）にすがりついていて」、これは、終わりの日におけるユダヤ人にすがりつく異邦人のような姿である預言と読めることは興味深いことです。イザヤ書 14 章 1、2 節

16 節私たちが私たちの神さまのため、イスラエルのこの方を選ぶ時、この方の民を私たちの民として選択しなければなりません。一たとい彼らが最初にはすがりつけないようなむしろ閉鎖的なものだったとしても一神さまの選びの民を散らすことは、神さまが永遠の愛をもって愛している民を散らすことになるのです。この方が永遠の契約（エレミヤ 31 章 3 節）によって無条件に彼らを愛している時、神さまのご神格が条件的に神さまの民を愛してきたために、呼び掛けられている、クリスチャンらは、神さまの民を愛するためにどのようになすべきでしょうか。

イスラエルがあなたを、最大に必要なとしている瞬間、あなたはイスラエルを抱きしめる用意があるでしょうか。それとも国々によって地球規模でイスラエルが責め立てられる時に、あなたは離れ去っていきますか。

真実な友人であるという幾つかの定義は、全世界が滅びようとも、真っ先に駆け寄るのが真の友人といえるのではないのでしょうか。わたくしは、あなたがたにこのような類いの友人になるように望んでいます。

三度もナオミは、ルツにモアブの地に（11、12、15 節）戻るように主張します。ナオミへのルツの愛は真剣でした。彼女の愛は、イスラエルを愛する、神さまの愛そのものでした。—それは決して破られることのない契約です。クリスチャンとしてユダヤの人々への私たちの愛は、条件的な愛であってはなりません。

私たちが必要としているのは、イスラエルを愛する、神さまの愛です—それは、神さまの民イスラエルへの無条件な愛なのです。私たちは、この愛を、詩編 89 篇 30—34 節に見る類の愛を見ることができます。ここに、神さまが、ダビデの子孫、ユダヤの人々に置かれた彼の契約を参照することができます。

真実な愛は、神さまの類の愛です。

ローマ人への手紙 11 章 28 節には、ユダヤ人に対し、クリスチャンに要求されているこの種類の愛が現れています。

b. 犠牲が伴おうとも、ユダヤ人と共に立ち続けようとするルツであろうとすること

9 節にナオミは、別な夫と共に彼女らに安息の地を、それぞれに神さまが与えるように願いました。これはこの書物において主張しているカギとなります。結婚は女性にとって安全を意味しています。古代中東近辺の、夫がいない女性は、保安上欠けが許されているために深刻な状況に陥ったのです。やもめたちは、特にその必要がありました。ナオミはレビレート婚という、遺された兄弟が嫁をめとるという聖書に書かれた通りに子孫の存続、財産継承、名前が断たれないための結婚の責任という、イスラエルの習慣を参照にしました。（申命記 25 章 5—10 節）ナオミは、これがもう自分には息子がいないためにこのケースは不可能だということを指し示したのです。

ルツは、ナオミと共に行くことは、モアブでの別な誰かとの再婚の機会を諦めるということであることを知っていたのです。ユダヤの地においてはわずかなユダヤ人だけが、異邦人との結婚を考えたのです。

ルツ記 1 章 16 節 わたくしたちの中でどれだけの者たちが、隠されたユダヤ人たちとガス室へ共に行く危険を冒したのでしょうか。必要とされている最大の時に、わたくしたちは本当

にユダヤの人々と共に行く用意があるでしょうか。もしわたくしたちがルツの心を得ているなら、わたくしたちはそうします。

イスラエルに自身をささげて忠誠を尽くす人々は、イザヤ書が預言した小さな一部分です（14章1、2節）。どれだけ多くの人々が、ユダヤの人々を支援し、抱きしめることにより、犠牲的に仕える用意があるでしょうか。

5. ルツの祝福

イスラエルの味方であり続けるという犠牲は、見返りにおいて祝福にまさるには程遠いものをただただ与えることです。ルツはたくさんものを犠牲にしましたが、しかし、ナオミにへりくだって仕えることにより、豊かにその報いを受けたのです。（箴言 15章 33節）

何年もの不妊の後、彼女には息子が与えられました。（4章 16、17節）

わたくしたちは、メシアがオベデの腰から来ることを知っています。ここに、ナオミ、すなわちイスラエルが、ついにメシアを抱きしめる、その前兆となる日をわたくしたちが見ていると私は信じます。

ユダヤの人々がいつの日か、メシアと彼の赦しを受けるだろうと、神さまのことばは、わたくしたちに教えています。（ローマ人への手紙 11章 26、27節）

ナオミ（ユダヤの人々）の解放と救いにおいて、ルツがなしたように、わたくしたち教会は中心的な役割を担うのです。しかし、それは頬に口づけすることや、美辞麗句を何か述べること—福音を宣べ伝えることよりも、もっと要求されることになるでしょう。それを意味することは、無条件にユダヤ人を愛する意志を持ち続けることとなります。そして、それは犠牲的な愛の実証を意味することになるでしょう。

D. 聖書の約束は、決して取り消されることはない

・レビ記 25：23 「地は買い戻しの権利を放棄して、売ってはならない。地はわたしのものであるから」のみことばに従い、この地は主のものであり、それは割り当てられ、配置されているのです。

・申命記 32：43 「諸国の民よ。御民のために喜び歌え。主が（中略）ご自分の民の地の贖いをされるから」

・第二歴代誌 7：20 神さまは、もし民がご自身を侮るなら、「わたしが彼らに与えた地から、彼らを根こぎにし…」

・詩編 85：1-2 「主よ。あなたは御国に恵みを施し、ヤコブの繁栄を元どおりにされました。あなたは、御民の咎を赦し、彼らのすべての罪を、おおわれました。セラ」

・イザヤ書 8：8 この国は、われらの父なる神に属し、それはメシアの国です。「…インマヌエル。その広げた翼はあなたの国の幅いっぱい広がる」

・エレミヤ 2：7 主は、なぜ民がこの国から追われたのか、エルサレムの町がなぜ破壊されたのかを語っておられます。「しかし、わたしはあなたがたを、実り豊かな地に連れて入り、その良い実を食べさせた。…ところが、あなたがたは、入って来て、わたしの国を汚し、わたしのゆずりの地を忌み嫌きらうべきものにした」

・エゼキエル 38：16 神さまは終わりの時代に、民たちがイスラエルに対抗すると語っておられます。主のものである地が奪われる対立について神さまは語っておられます。「あなたは、わたしの民イスラエルを攻め上り、…わたしはあなたに、わたしの地を攻めさせる。それは、わたしがあなたを使って諸国の民の前にわたしの聖なることを示し、彼らがわたしを知るためだ」

・ヨエル書 1：6、2：18、3：2 この書には3度、この地が、主に属するものであることが参照されています。「一つの国民がわたしの国に攻め上った」（1：6）、「主はご自分の血をねたむほど愛し。ご自分の民をあわれまれた」（2：18）、「わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシャパテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで、彼らをさばく。彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ」（3：2）

・ホセア 9：3 イスラエルが散らされる、という箇所は以下の通りです。「彼らは主の地にとどまらず、エフライムはエジプトに帰り、アッシリヤで汚れた物を食べよう」

・ゼカリヤ 9：16 「その日、彼らの神、主は、彼らを主の民の群れとして救われる。彼らはその地で、きらめく王冠の宝石となる…」

わたしたちがイスラエルについて語る時、以下のことを扱います。

1) 神さまの宣言であること、神さまの財産の一部を担っていること。

2) 神さまが与えた地は、神さまの民に与えられたこと。全てのものの創造主の主要問題は、交渉する余地のないことです。神さまが語られたことは独自のものであり、イスラエルは決して取り消されることはないということです。

・神さまにこの地が属するだけでなく、アブラハムとその子イサクを通しての子孫へ分け与えの地として委ねられたのです。(創世記 17：7-8)

・「怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、…わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない…」(イザヤ書 54：8-10)

・罪と離散を通して、イスラエルによる統治が失われたことは、決して神さまが自ら語られた契約を改善されたのでもなく、むしろそれを永遠のものとしてされました。(エゼキエル書 37：

1-28 をお読みください)

E. 結論—活動の要点

1. エルサレムの平和のために祈ること
2. あなたの信仰のユダヤ人のルーツ、根源がユダヤ人であることを理解し続けること
3. イスラエルとユダヤの民と共にある連帯意識を表明すること
4. イスラエルへの旅のために祈ること

※この説教要旨は、ウエイン・ヒルドソン牧師とジャック・ヘイフォード博士によって発行されたテキストを含め、他のさまざまな資料から作成されました。これらの観点を分かち合えることの協力を彼らに感謝します。